



# お母さん、お父さんに感謝

はがきキャンペーンに若い世代の応募が増えた結果、社会人になって、母になってつる親への感謝を綴った作品が多くなりました。93歳になつた今でも、義理の母である育ての親への思いを「私もあと何年かでそちらに行きます。その時は、恩返しいたします」と綴った宗像アキさんの作品は、審査員の胸をうち、審査員特別賞を受賞しました。身近な人への「ありがとう」はなかなか気恥ずかしくて言えないもの。そんな「ありがとう」を、紹介します。

## 形のない贈り物

三重県  
佐野 由美子 (47)

**私** には、玄関のスリッパを揃える癖がある。気を付けてやっているわけではなく、自然に手が動いてしまうのだ。

ある日、昔からの知人がやってきて、玄関に揃えられたスリッパを見

て微笑んだ。

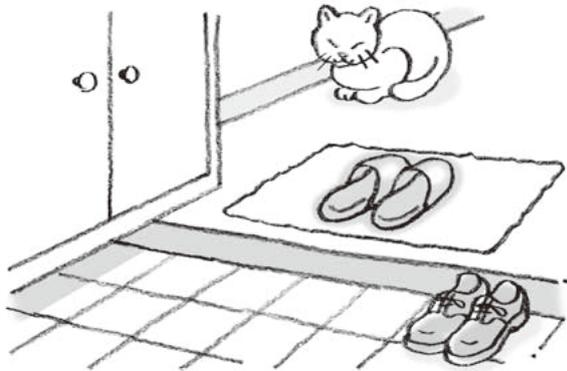
「あれえ、懐かしい。やっぱり香代ちゃんと一緒ねえ。」

香代ちゃんというのは、私の母である。肺がんに罹り、若くして亡くなった。「みんな無事に帰ってきますように……」そんな気持ちを込めて出かけた家族のスリッパを家の中へ向けて並べていたという母。

早くに亡くなった母。もういない母。会うことも話すこともできない母。だけど私は、彼女からいろいろなものを受け取っている。それが嬉しかった。

玄関にあるスリッパに、「ありがとう」とつぶやいた。

(抜粋)



## 人生を変えた父の言葉

熊本県  
相良 真央 (22)

**男**

三兄弟の末っ子として育った私は、気丈な母と真面目で優しい父のもとで、甘やかされて育った。大学進学で県外に出た私に一人暮らしは荷が重かったのか、荒んだ生活を送っていた。

ろくに大学にも行かなくなり、趣味のバンドにのめり込む毎日。そんな生活が続けばと考えた私は、「将来はバンドで食っていくから」と両親に告げた。

「人生は遊びじゃないんだ。真剣に考えろ。」

生まれて初めて父の怒鳴り声を聞いた。

後日、母より、バブル全盛期に銀行員となった父は、バブル崩壊とともに崩れていく社会やその渦に巻き込まれる人々を見て、息子にはそんな思いをさせたくないからと、悪者になつても息子に真剣に人生を考えて欲しかったのだ、と伝えられた。

そんな父の思いを知った私は、父が今まで命を懸けてやってきた仕事に興味が出始め、今、私は父と同じ銀行員となった。親孝行にはまだまだ遠いかもしれないが、心から伝えたい。ありがとう。

(抜粋)